

「Do you know 能？」第三弾

～ガイドなら一度は観ておきたい能楽～

2016年9月10日実施 JGA 第一支部研修 終了レポート

2016年9月10日、独立行政法人日本芸術文化振興会 国立能楽堂においてJGA 第一支部能楽研修を実施し、37名（会員31名、非会員5名、運営委員1名）が参加した。

研修生用の能舞台がある会場にて、国立能楽堂営業課長 吉成大四郎氏を講師に迎え、まず、後継者養成やJGA 会員も協力した外国人向けの能楽普及公演など、能楽堂の活動についての説明を受けた。研修は①能楽の基礎知識の講義、②研修用能舞台体験、③能楽鑑賞と充実した内容。講義では猿楽が将軍義満に見出されて脚光を浴び、江戸時代には幕府の式楽となった歴史、流派、能楽を構成する役、能舞台の要素などを学んだ。参加者からは揚幕の色や床下に甕が埋まっているのは本当か？など、活発な質問が出た。（因みに国立能楽堂の舞台の下には甕はないとのこと。）



その後白足袋に履き替えた参加者一同で能舞台へ向かう。まず楽屋から鏡の間へ。役者はこの部屋で椅子に座って鏡に向い、役に入っていく。用意が出来たところで「おまーく」と声がかかり、幕をこんな風に、と課長と参加者で実際に上げてみる。また、今日の演目では女性の役が重要とのこと、小女と般若の面を見せていただく。女性の面は、髪の毛の描かれ方で区別できるといい、怖い般若の面にもよく見れば女性らしい長く繊細な髪の毛がある。さて、参加者一同吉成氏から「ぜひ摺り足で」と促されつつ、橋懸（はしがかり）を通り本舞台へ。ここで小女の面を実際に手に取り、顔にあてさせてもらう（般若でなくて良かった）。面は存外に軽く、そして視野の狭さは予想以上だった。



その後希望者は館内の食堂で昼食を共にし、いよいよ③能楽鑑賞。最初に金沢大学教授、西村聡氏の『玉鬘』の狂相と悟り」と題した解説・能楽あんないを拝聴、その後狂言「伊文字（いもじ）」、能「玉鬘（たまかざら）」を鑑賞。今回は橋懸に近い脇正面の席で、鏡の間の「おまーく」という声に続き、幕が上がり、役者が橋懸を進む際の緊張感も身近に感じられた。源氏物語の架空の人物である玉鬘が能の世界の中に息づき、舞う。地謡の方々、そしてワキの役者の顔もよく見え、正面席とはまた違う魅力があった。



その後希望者は館内の食堂で昼食を共にし、いよいよ③能楽鑑賞。最初に金沢大学教授、西村聡氏の『玉鬘』の狂相と悟り」と題した解説・能楽あんないを拝聴、その後狂言「伊文字（いもじ）」、能「玉鬘（たまかざら）」を鑑賞。今回は橋懸に近い脇正面の席で、鏡の間の「おまーく」という声に続き、幕が上がり、役者が橋懸を進む際の緊張感も身近に感じられた。源氏物語の架空の人物である玉鬘が能の世界の中に息づき、舞う。地謡の方々、そしてワキの役者の顔もよく見え、正面席とはまた違う魅力があった。

その後希望者は館内の食堂で昼食を共にし、いよいよ③能楽鑑賞。最初に金沢大学教授、西村聡氏の『玉鬘』の狂相と悟り」と題した解説・能楽あんないを拝聴、その後狂言「伊文字（いもじ）」、能「玉鬘（たまかざら）」を鑑賞。今回は橋懸に近い脇正面の席で、鏡の間の「おまーく」という声に続き、幕が上がり、役者が橋懸を進む際の緊張感も身近に感じられた。源氏物語の架空の人物である玉鬘が能の世界の中に息づき、舞う。地謡の方々、そしてワキの役者の顔もよく見え、正面席とはまた違う魅力があった。